

と、町の印象を記している。

湖尻の動かぬ水をおほひたる丸き水くさに秋の日あつ
き
石 博 千 亦

船よりも大きな帆を船なりに横さまにはりて白魚ひ
くも

香澄が浦ならひの風に帆を張りて白魚ひく船ここだ群
れたり
高 橋 刀 畔

秋風は白魚の栖む湖こえて常陸乙女の袖ふきかへす
川 田 順

は、その時の歌から抜いたものである。

喜連川（栃木）の歌人高塩背山は、大正十年八月、土
浦に来て、

しらじらと水草花さく土浦の入江をはしるモーターボ
ート

我が乗れる船室にさす陽のあつさ土浦の入江水沸きて
をり

一面に夕靄こめし湖のいづこともわかずよしきりのな
く

などの歌をのこしている。

この町をつらぬく堀江長くしてゆくゆくも見る白き藻
の花

真白なる堀江にそへる片側まちゆく稀に遠き柳見ゆ

この町をつらぬく堀江の橋行けば上の橋見え下の橋見
ゆ

この町の堀江に生ふる青水草なかば沈める舟に伸びた
り

これは窪田空穂の「土浦にて」と題する歌である。大
正十五年発行の『鏡葉』という歌集に収められている。

これの歌にうたわれている土浦の堀江は半世紀以上も
前のすがたである。

長塚節は、土浦に遊んで、この堀江から舟を漕ぎ出して
川口に出、湖上に乗りに出したのである。白い水藻の花が
柳のかげに咲き捨小舟が半分浮かんでいたりした。太鼓
橋がかかり、枝垂柳が雅趣を添えていた。土浦の俳人、
渡辺香墨は

二の橋の柳に遠し一の橋

とよんだ。かつてはこの堀江で活動写真「水藻の花」の